

第4回中野区基本構想審議会 部会（自治・共生・活力）

○日時 令和元年7月2日（火曜日）午後7:00～9:00

○会場 中野区役所7階 第10会議室

○出欠者

1 部会委員

出席者

岡井 敏、笠尾 敦司、岸 哲也、小池 浩子、高橋 宏治、高橋 佐智子
宮脇 淳、横田 雅弘

欠席者

米持 大介

2 事務局

企画課長 杉本 兼太郎

広聴・広報課長 高村 和哉

企画部参事（情報システム課長（統括）事務取扱） 平田 祐子

産業観光課長 堀越 恵美子

観光・シティプロモーション担当課長 桜井 安名

文化・国際交流課長 藤永 益次

区民活動推進担当課長 宇田川 直子

基本構想担当課長 永見 英光

【議 事】

○宮脇部会長

それでは、出席予定者の皆さんがそろいましたので、ただいまより中野区基本構想審議会の自治・共生・活力部会第4回を始めさせていただきます。

本日は、米持委員からご都合により欠席とのご連絡をいただいておりますけれども、半数以上の部会委員の方に出席していただいておりますので、会議は有効に成立しております。

終了の目途は9時としたいと思いますので、よろしくお願い申し上げます。

では、次第にあります「1 部会第2・3回審議内容について」、そして「2 区民と職員のワークショップ、区民と区長のタウンミーティングの実施結果について」、事務局から説明をしてもらい、第2回、第3回の部会の審議内容について、振り返りをしたいと思いません。

最後に、その他といたしまして、重点テーマに捉われず、自治・共生・活力部会について、全般について審議する時間を設けたいと思いますので、よろしく願います。

それでは、まず本日の配付資料と「部会第2・3回審議内容」、「区民と職員のワークショップ、区民と区長のタウンミーティングの実施結果」について、事務局よりご説明をお願いしたいと思います。よろしくお願いいたします。

○永見基本構想担当課長

私のほうから説明させていただきます。

次第の次の紙に資料の一覧というものが添付されているかと思えます。資料1からご説明させていただきたいと思えます。

まず、資料1、自治・共生・活力部会（第2・3回）審議内容等の概要というものでございます。このA3判のホチキス止めの資料でございます。こちら、5月10日（金曜日）と5月30日（木曜日）にそれぞれ開催をいたしました部会の内容を取りまとめたものでございます。

分類が4分類、前回は4分類しておりましたが、今回は少し言葉を変えました。左上のほうは「多様な人と人のつながり（まちのあり方）」、という形にしています。右上が前回「スタートアップ」という言葉を使っていたけれども、「新しい行動と価値の創出」、そういったものが生まれてくるということで表現してございます。それから左下のほうが、「区民と行政の協働」という形にしています。それから右下は、「行政がすべきこと」という分け方にさせていただいておまして、こちらの部会も含め、他の部会でも前は「多様性」、「協働」、「スタートアップ」、「その他」という分類にしていたのですが、少しわかりづらいというご意見もありましたので、こちらで考えて整理をし直したものでございます。

なかを見ていただきますと、茶色く表現されている文字があるかと思えます。こちらは後ほど紹介いたしますけれども、区民と区長のタウンミーティング、それから区民と職員のワークショップを実施しましたので、その内容をこちらに茶色い字で表現させていただきました。

この茶色い字が全ての発言というわけではなくて、ワークショップ、タウンミーティングと、この部会の発言が重複しているものについては、あえてこの中に表現しておりませんが、部会の中であまり発言が出なかったけれども、ワークショップ、タウンミーティングではちょっと発言があったというものを表現させていただきましたので、後ほどそういった目でご覧いただければと思います。

続きまして、2つ目、A4の横の資料でございます。こちらは「他の部会と情報共有をはかる意見」というものでございまして、左側のほうに部会名が書かれております。例えば、「子育て・教育部会より」と書いてあるものですが、子育て・教育部会でこういった発言が出ましたと、右側のほうに自治・共生・活力部会ではこういった発言があった、ということが書かれてあります。ほかの部会のほうから発言があつて、こちらの部会のほうで発言がなかったところなどをご覧いただいて、またちょっとご意見などをいただく形になろうかと思っております。

裏のほうは、下に「他部会に関連する自治・共生・活力部会の意見」。これは自治・共生・活力部会で意見が出て、都市・防災・環境部会に対して申し送ったという内容ですので、こちらのほうは参考にしていただければと思います。

続きまして、資料3は、ご紹介いたしましたワークショップの報告書となっております。表紙をおめくりいただきますと、無作為抽出で区民約2,000人にご案内をお送りして、ワークショップに参加したいとお返事をいただいた方を対象にして実施をいたしました。人数としましては、第1回36名、第2回37名。これは同じ方なのですが、1回目は欠席をされていたということです。その中に職員もまじってグループワークを行いました。2ページの内訳をご覧くださいますと、20代から70代、また男女、ある程度満遍なくご参加いただいたのかなと思っております。

さらに開いていただきますと、ワークショップの実施のやり方など書いてございまして、審議会の部会と同じテーマで進行させていただきました。例えば自治・共生・活力部会でいいますと、6ページのところに、こんな意見が出ましたよということが書かれてございます。

当日、附箋を使って模造紙に張っていただく形だったのですが、14ページ以降、実際に附箋に書かれた言葉を文字に起こしております、アンケートの結果というものも27ページ以降に記載しておりますので、参考までにご覧いただければと思います。

それから、資料4ですね。区民と区長のタウンミーティング、5月14日、中野区役所で

自治・共生・活力をテーマにして実施いたしまして、18名の区民の方々にご参加をいただきました。

発言の内容については、めくっていただきますと各グループの発表概要がございますので、こちらも後ほどご確認いただければと思います。

最後、資料の5というものですが、A3判のホチキス止めになっているものですが、こちら「現行の基本構想との対応表」ということございまして、左側のほうに、現行の基本構想、2列ですね。第3章、第4章がございますけれども、現行の基本構想の表現が書かれてあります。その右側に答申のイメージということで表記をさせていただいて、一番右端に対象となる部会ということで書いてあります。

こちらご覧いただきますと、例えば現行の基本構想では書いてあるけれども、答申のイメージが空欄になっている。そういった場合には、まだ現行の基本構想で話したけれども、部会の中ではあまり話されていないのかなと、そんなところが見えてくるかと思えます。

必ずしも現行で書いてあるから書かなければならないというわけではないのですが、もれなく話題にさせていただいているかどうかという確認をするための資料として、お役立ていただければと思っております。

自治・共生・活力というところでいいますと、1ページ下からの2ページにかけてございますし、6ページ下のほうから7ページにかけて、それから最後ですね、10ページにもありますので、後ほどそちらのほうもご覧いただければと思っております。

資料の説明は以上でございます。

○宮脇部会長

ありがとうございました。それでは、部会の第2回と第3回の審議内容について、議論を進めてまいりたいと思います。今、ご説明がありましたように、区民と職員のワークショップ、区民と区長のタウンミーティングの実施結果で出た意見につきましては、資料1に、茶色の字で反映をしているということでございます。

また、その後にご説明がありましたけれども、他の部会と情報共有を図ることの意見ですとか、こういったものも参考にいただきながら、ちょっと資料が多くございますけれども、ゆっくり見ていただきまして、これらを参考にしつつ、審議内容、答申のイメージに不足点はないかどうか等々について、今日のご議論いただきたいと思います。

ただ、漠然と議論をしていくということではまとまりが悪くなりますので、資料1、カラー刷りのものですが、まずはこれをベースにしながら(1)(2)ごとに区切ってご

意見をいただいて、その後、全体のまたご意見をいただくといった流れで、まず進めてまいりたいと思います。

資料が多いこともございますので、ちょっと眺めていただきながら、まずカラー刷りの(1)区民と協働・協創する自治体という、この部分につきまして、答申に向けたイメージでの不足点ですとか、あるいはご指摘いただけるその他のことについて、ご自由にご発言をいただければと思います。お願いいたします。

いかがでしょうか。ご質問も含めてお願いいたします。

○横田委員

「(1)区民と協働・協創する自治体」の「多様な人と人のつながり」のところですが、つながりって放っておいてなかなかつながるものではない。個人と個人はつながっているけれども、団体があまりつながっていないということが書かれていますし、下のほうでは、世代ごと、または外国人で集まると。いろいろな団体があるのだということで、団体で集まって、そこからその特性に応じた発信をするということは大事だろうと。

ただ、それぞれが自分の特性だけについて発信するというのでは、やはり全体が構築されていかないので、違う特性を持たれた方々の団体が、互いにつながり合えるような形を制度的につくっていかないと、つながりはなかなかできないと思います。

ほかの資料ですけれども、「他の部会と情報共有をはかる意見」の子育て・教育部会の2つ目に、私が今、中野のダイバーシティの推進を目的に取り組んでいるプロジェクトと同じ問題意識が書かれています。要するに、中核となる地域を活性化するキーパーソンを区が把握し、連携することが必要であると書かれています。これが今申し上げたように、少なくともそのキーパーソン同士がいろいろな状況について、ダイバーシティの視点から意見交換ができるようなラウンドテーブルがぜひ欲しいなど。

自分がこの3年間、科学研究費をいただいて取り組んでいるのは、まさに中野の多様な方々同士の、総論はダイバーシティ賛成なのだけれども、各論になると、それぞれの組織の方向が少し違って、互いに理解が進んでいないという状況があるなかで、どうやったら互いにつながってダイバーシティ全体を連携して浸透させることができるかということですね。このような場を、区が把握する必要があると子育て部会では書かれているのですけれども、私たちは区が把握するというよりもダイバーシティの当事者、区、産業界、教育・研究者などの中で、この問題に関心を持って動いてくださる方々の組織を立ち上げようとしています。

これは、この科研のメンバーを中心として、何人かのコアになってくださる方々にお呼びかけをしながら、できれば秋ぐらいにコアミーティングを持って、その後、組織を立ち上げて、多様な方々が自分たちの問題点、課題、中野にこういうふうになってほしいという要望みたいなものを持ち寄りながら、ラウンドテーブルの中でどういったものについては共通だね、どういったものについてはうちの特性なのだということを議論していただきたいと思っています。その議論をとおして、ダイバーシティの浸透を評価できるような指標であるとか枠組みといったものをつくっていく必要があるのではないかなと思っています。

ちょっと長くなりましたけれども、ちょうど今、このことをやりたいなと思っておりましたので、少し発言をさせていただきました。

○宮協部会長

そうすると、今の先生のご発言でいくと、「区民と協働・協創する自治体」の中の、やはりそういうラウンドテーブルとかそういうものについては、行政がある程度場をつくり上げていくことが必要だと。

○横田委員

私は、行政に参加してもらいたいと思っています。

○宮協部会長

参加してもらうわけですね。

○横田委員

行政がやるというよりも、もうちょっと自由度のある形でやるほうが発言しやすいのかなと思いますが、そこに行政が全くかかわっていないとやはりいけませんので、行政もその一翼を担っていただくという形で、少し自由な場を設定してみたいと思っていますので、そこにご参加いただければと思います。

この話は、(1)のところだけではなくて、次の(2)の多様な違いを力に変えるというところにも関係している部分で、ちょっとどこでお話ししようかと思いましたがけれども、先にお話しさせていただきました。

○宮協部会長

そうですね。ありがとうございます。そうすると、今の(1)のところでの話だとすると、区民との協働・協創と、行政もきちんと参加してくださいよと、そういうご指摘ですね。

○横田委員

はい。

○宮脇部会長

最終的にどこに入れるのかといったことについては、また全体像を見て議論させていただきますけれども、今のご発言のところをちょっとメモしておきながら、整理していきたいと思います。

そのほか、お願いいたします。

○岡井委員

2点ございまして、マトリックスの左下、「区民と行政の協働」のところの、発言内容の③番「地域の団体などに所属していない区民が、やりたいことをできるよう、区から支援を受けることができる」と言っていたのですが、たしか、住民意識調査で、こういう地域活動に入れていない方、若い方々がとても多かった。その方々は情報がない、時間がないということが主要因だったと思うのですが、多くの方が町会を始め団体には入れていないという状況、ちゃんとしたデータはこれにないかもしれませんが、多いと思います。

その方々が、どこかの団体に所属していくという動きももちろんちゃんとサポートしていく必要はあるのですが、やはりそうは言っても入り切れない、時間もないという中で、そういった団体に入っていないかというところが何か感じられるような一文があると、よりいいかなと思ったというのがまず1点目でございます。

続けて、もう1点目もそのまま発言させていただきますと、右下のほうのマトリックス、「行政がすべきこと」というところで、全体的に区の職員の方がみずから地域に出ていくとか、区民と協働してということで、今回の基本構想の議論の積み上げをしている中でのタウンミーティングとかもそうだと思うのですが、職員の方が平日の、今日も夜間ですね、19時から、あるいは土日も職員の方はタウンミーティングにいらっしゃいましたけど、そういったところで負荷をどんどんかけてやりますよというだけではなく、プラスで何かそこでICTを活用して効率化をしていくのだよとか、あるいは区内でも、役所の中でも働き方改革でフレックスというのをもっと柔軟に使うのだよとか、何かその辺がないと、ちょっと義務感だけが増えて大変ではないかなと思うので、基本構想に入るかどうかは別として、何かちょっと、何かを増やしたら一方で減らすということが感じられるような内容になっているといいかなと思いました。

○宮脇部会長

ありがとうございました。特に後者の件につきましては、永見さん、行財政改革という視点は、基本構想の中でいうと、どういう位置づけになるのですか。

○永見基本構想担当課長

現行の基本構想においても、行財政運営という章がございますので、新しい基本構想の章立てについてはまだ決まっておりませんが、そういった行政運営の部分についての記載はされる形にはなるかと思っておりますので、貴重なご意見をありがとうございます。

○宮脇部会長

やはり負荷がかかっていくのであれば、かつ職員の方々に人的資源の限界がある中でいうと、やり方をかなり工夫していかないといけないというのはそのとおりで、単に皆さんにやってくださいというだけのことだと持続性がないと思いますから、今のご発言というものも、全体会も含めてやはり受けとめて、検討していくということだとは思っています。

ほかの委員の皆さんもご意見いただければと思います。そのほかの点でも結構です。お願いします。

○岸委員

関連するかもしれないのですが、右下の区職員の方たちが地域課題を解決しているところの表現なのですけれども、たしか区長のお話でも、その自治体のバージョンを上げてというお話があったと思うのですが、協働してということを考えると、住民側のバージョンも同じように上がっていないと、協働とはならないのではないかなというのがどうしても感じます。

ただ、そのことを行政としてどういうふうに表現するのかというのは、よくわからないのですが、いずれにしろ、そこは避けられない点だと思いますし、これだと解決するのは、何か区職員みたいに感じます。

だから、地域課題を解決するというよりは、そもそも起きないようにするにはどうしたらいいかというのを関係者、住民を含めて関係者で何か新しく見出していくみたいなことが方向としてあればいいのではないか思うのですけれども、こういった書き方でいいのかなとは思っていました。

○宮脇部会長

今、ご指摘があったように、今のような内容を行政側から積極的に提示するというのは、基礎自治体の場合、なかなか難しいと思います。今のことは地方自治の原点だと思いますので、表現をいろいろ考えながら、我々がやはりきちっと答申等に反映できるように、伝

えていくという役割を果たしていかないといけないのかなと思います。

ありがとうございます。

○横田委員

仕事ばかりがどんどん積み重なってはいけないので、そここのところは改革していく必要があるとしても、中野区の職員の方の基本的なスタンスを自分たちが出ていって一緒にやるというスタンスに変えましょうというのは、すごく大きなことだと思うので、そのことをきちんと表現することには意味があると思います。

○笠尾委員

立場を超えて、区の方も住民の方もフラットな関係性の中で、できることはできるし、できないことはできないみたいな、そこをはっきりさせつつやっていく必要があると思います。

というのは、職員だからと、どうしても背負い込んでしまうこともあると思うので、なるべくフラットな関係性をつくりましょうというところが前提にあるといいのではないかなと思うのですね。

○宮脇部会長

おっしゃるとおりですね。どうしても公助を前提にしてしまうのですよね。要するに、行政が何かをやってくれるという。その前提として、今、先生が言われたように共助ですよ。フラットな関係でお互いに何をやりますかということが原点ですということをきちっとどこかで言わないと、せっかく一緒にやるということが、非常に持続性がなくなってしまいます。

今のご意見を踏まえながら、少し全体会議では強く反映させていきたいと思います。我々の部会が言わないと、ほかの部会からは全体的に言えない部分でもありますので。ありがとうございます。

それでは、少し間口を広げます。(1) と非常に密接に関係するので(1) にいつでも戻っていただいて構いませんので、(2) 違いを力に変える多様な連携というテーマまで視線を広げまして、またご意見をいただければと思います。

○小池委員

(1) と(2)、両方に関連する話題なのですが、(1) の右下のところ、「区の情報発信力を強化してほしい」というところがあるのですが、これは外国人の視点からは多言語対応だとか、そういった部分と関連してくるのかなと思うのです。

ある種、情報発信の手法の多様化はある程度進んでいると思います。ただ、区報であったりとか、町会の掲示板に掲示されたものは、どうしても限られた情報量なので、その先を詳しく知るためには問い合わせをせざるを得ない。問い合わせが増えると、これも先ほどの話と関連して、電話の応対に非常に時間を割かれるとか、職員の皆さんの業務量に負荷がかかってくると思うのです。

だから、その発信された情報の問い合わせを、受けるところを、一元化するのは難しいのかもしれないのですが、情報が1カ所にまとめられていたりとか、ここにというのがもう少しわかりやすくなるとよいのかなというのが、ここの補足としてちょっと思ったところでした。

○宮脇部会長

これは、今ご指摘のあったところのすぐ下の答申のイメージのところの②なのですが、区は縦割りを解消したトータルなサポートを提供しているというところですよ。情報共有がきちんとできていないと、縦割りは克服できないし、先ほどの行政運営のところにも密接に関係してくるというご趣旨だと思うのです。そういうところをきちんと関係づけて整理をしていかないとだめではないでしょうかと受けとめたのですが、何かこの縦割りを解消したって、言うは易くというやつなのですけれども。この辺のところは何か踏み込んだ整理というのがイメージされているのでしょうか。

というのは、ごめんなさい、毎回計画をつくと毎回出てくる言葉なのです。だから、ずっとやり続けなければいけないことは確かなのですけれども。これは今までの連携にも密接に関係してきますが、今のお話の中で何かイメージってありますか。

○永見基本構想担当課長

そうですね。いつもこういったことは、課題としていろいろなところで言われるところではありますので、区としても常に認識していなければいけないところかなと思っております。

例えば、新庁舎を整備する計画もありまして、そういったなかで、ワンストップサービスなどについても、研究をしております。

そういった動きもあるなかで、いろいろな形で縦割り解消に向けて研究していきたいと思っております。

○小池委員

縦割りの末端の事例で、実際に起きたトラブルの話ですが、ホールの減免利用の予約が、

福祉のセクションと文化のセクションで映画上映会という形で2回入っていたのですね。内容がわからないままだったのです。それがふたを開けてみたら、2つとも「おくりびと」だったと。福祉の視点であれを捉えていたのと、文化芸術の視点で、近隣で上映がなかったから人気の映画だし上映したいと。チラシができ上がってきてみたら、2週間の間に同じ映画を2回と、混乱しますよね。皆さんよかれと思いつつ、横の連携も考えつつやっていたのが、ふたを開けたら、ちょっとやっぱり連携不足だったのかなということが起きたりしているのですね、結構現場だと。

なので、そういう事前の情報共有。なかなか難しいと思うのですけれども、解決していかないといけない課題が結構あるのではないかなと思いました。

○笠尾委員

そういうのは、できればAIとか活用していけばいいのだろうと思うのですけどね。人間がやっていくと、どうしてもいろいろな漏れとかもあるし、何か使えるものはどんどん使っていくという姿勢が必要かもしれないなど。

○岡井委員

これ縦割りでなくなったら、どうなっているのだろうと考えたときに、今は事務事業とかを課ごとにつくったりするのですが、それが乗り入れで事務事業をつくっているみたいな。発言というより質問になってしまいますが、そういうふうになるのですか。行政評価もだから、物すごく複雑になってしまうように思いますが。

○宮脇部会長

縦割りはなくならないと思うのです。これは、どんな組織でも縦割り、上意下達ということとはなくならないし、それが効率的な場合が非常に多い。今、ご指摘ありましたけれども、まとまりがなくなってしまうというのが一番まずいわけです。

ただ一方で、権限と業務と情報共有ということが一体化していないというご指摘が今まさにあったわけですが、もう少しそういったところで、縦割りはなくなりませんが、情報共有はきちっとしていくとか、その欠点を克服するような仕組みづくりが必要だと思います。

ですから今の皆さんのご議論を聞いていて、(1)だけでなく(2)の違いを力に変えるというのは、行政組織内のそれぞれの違いというのが存在していて、それを変える多様な連携というのが、恐らく必要なのだろうかと改めてそう思いました。

やはり同じことを繰り返すのではなくて、もう一歩違う視点というのを入れるというこ

とが、行政の皆さんにとっても、職員に限られる中で重要なことだと思いますので、少し検討させてください。

○横田委員

情報共有というのは ICT を使ったシステムのことを意味しますかね。あるいはコンシェルジュ的な、そういうセクションが情報を調整するということなのか。

言うは易しですが、やはりシステムになっていないと、なかなか実現しないですね。

○宮脇部会長

システムにできるところと、そうでないところというこのすみ分けが必要で、恐らくシステムにできるところもかなりあるだろうなど。

ただ、それに今、余計なことですが、権限が全部ついているので、そうできない部分もあるわけですが、その辺のところは捉われずに、大きく分けてみるというのもいいのかもしれないかもしれません。ルールではなくて、ICT などの機能的にできるものとできないもの、これを分けてみると。

政策論ですから、そこからやるべきかなということは、今ご議論いただいたと思います。

ちょっとこれ、(1) と (2) ですね、ちょっと検討させてください。

そのほか、いかがでしょうか。

○高橋 宏治委員

ちょっと視点を変えさせていただいて。例えば、地域で活動している人たちに多様な人と人とのつながりが深まったらいいねというのがあるのですが、人と人とのつながりを嫌う人もいるのですよね。

もう 1 人でいいと。だから、それを個性とすると、そういう個性を吸収する仕組みを立ち上げないと、地域社会としては大変なのですよね。多分町会の状態もそうです。私たちは町会に入らない。地域にも入らない。それは個性です。でも、その人たちも重要な区民ですから、その人たちにどう発信して、こちら側に来ていただくかという仕組みがまだなかなか見えない。そんな気がするのですよね。

だから、そういう発信もできればあったらなど。一番難しいところ。

○横田委員

押し付けがましくないやり方ということですか。

○岸委員

ちょっと質問。この「新しい行動と価値の創出」の答申のイメージの②なのですけれど

も、私の国語力なのか、意味がよくわからないのですけれども。「日常的に、まち全体を舞台とした多様な文化活動が、自主的・継続的に行われている」というのは、何だかどうい
うイメージ。何か上のほうの発言内容から、どういうふうに考えたらいいのかなと思った
のですが、この「日常的に」という言葉の位置が変なのかな。これは、どんなことが起き
ているというイメージですかね。

○永見基本構想担当課長

こちらに書いてある発言は、この部会の中でこういった趣旨のご発言があったかなと思
っております。要約の仕方としてこれがいい書き方なのかというのは、あるのかなと思
いますけれども。たしか2回目の部会のときに、そういったお話で、複数の委員がこうい
った趣旨の発言をされていたような記憶がございます。

○岸委員

多分気楽にというか、割と参加しやすいみたいな、そういう言葉の意味で日常的にとい
う感じですかね。日常的にイベントに参加できるという。ということですかね。

○笠尾委員

これに関係したようなことで、私が話した記憶があるのは、何かを日常的に表現活動
をしようと思ったときに、いろいろな規則があり過ぎて、やれないことが多い。なので、そ
ういうことを少し緩くして、個人個人が何かしらの活動がしやすくなるといいのではない
かということを行ったとは思いますが。

○宮脇部会長

そのほかにいかがでしょう。先ほどの個人で、周りとは結びつかないという、そういう人
たちをどうするかという、これはまた(3)のころの地域愛を育む人のつながりという、
そういう問題にもなってくると思います。(3)のほうにも視野を広げながら、少し自由に
ご意見をいただければと思います。

○笠尾委員

つながらないというか、個でいいという、学生は結構いるのですよね。別に私は人とか
かわりたくないとか、勝手にさせてくださいと。でも、人間、基本的に社会的な生き物で
すし、そういう子でも、自分から何かしたくないだけで、そういう場に強引に参加させられ
てしまった後になると、こういう機会があつてよかったという学生は結構いるのですよ。

ですから、かわりたくないとか強くそう思っている人と薄く思っている人はあると思
います。薄く思っている人に対してどういうアプローチがあるかみたいなことだと思うので

すね。

そういう意味では、今、いろいろな括りとして、例えば商店街だとか町会だとかありますけど、それとは別の括りみたいなもの、副次的にどこかしらにオーバーラップしながらまた重なるつながりがあると、もっと楽になるのではないかなとは思うのですよね。

必ずここに入らなければいけないと言われるよりは、こっちの括りもありますよ、みたいなものもあれば、そういう人たちは、より入りやすくなっていくのではないかなと思っております。

○横田委員

いろいろな国の外国人の方々が住んでいるということも考えると、その人たちがみんな同じようになると考えるのはよくないので、参加したいという人がいれば、参加したくないという人もいるのだけど、お互いに足を引っ張ったり、攻撃的になるということは避けないと共存できませんから。何か1つになるとか、みんな同じようにやるということの強制はしない。だから安心していいよと。1人でいたいときは1人でいてください、ということも許すということも大切に、ちゃんと打ち出していけないかなと思います。

○小池委員

渋谷区の話ですけれども、「おとなりサンデー」というイベントを3年ぐらい前からやっていらっしゃって、元ネタはフランスのラ・フェット・デ・ヴォワザンというご近所まつりと日本語で訳しているものです。猛暑の年に、フランスはエアコンをつけていないお家が多くて、割と個人主義の国なので、横のつながりがなかったので、ご自宅で孤独死されるお年寄りが非常に多い年があったのですね。それを改善しようということで、民間の人たちが立ち上げた、ご近所同士でパーティをするというときの手助けをする組織だったのです。チラシをつくるとか、そういう共通のフォーマットをつくってあげて、やりやすくする。

「おとなりサンデー」はまさにその仕組みなのですが、それのおもしろいところは、町会が主体になってもいいですし、民間の人たちがやってもいいし、誰が主体になってもよくて、「おとなりサンデー」の看板を貸してくれるという緩やかな仕組みなイベントなのです。

町会と別の人たちが一緒にやることもありますし、食べ物や何かおもしろそうな人が集まってそうだな、と隠れている人たちに思ってもらって外に出てきてもらう、という仕組みがとてもおもしろいな、と思っています。

一方、それでも出てこない人はきつといますが、そういうところで集まっている人たちがいれば、孤立している人だとか、見かけるけれども縁のない人でも、ちょっと目を配るという意識が生まれるのかなと思いました。

○宮脇部会長

よくいわれるミルフィーユ型というやつですね。いろいろな形のもがあって、それでやっていくということ。

先ほど先生が言われましたけれども、個でいたい人を完全になくすというのは、これは極めて難しいことだし、そうすべきかどうかという議論というのは、一方ではあると思うのですが、少しでもなくして行って、そういうネットワークをつくっていくということが、基礎自治体としては絶対不可欠である取り組みですね。

そういう意味で、我々のほうからそういう選択肢を全体会のほうに伝えていくということは不可欠だと思います。

○小池委員

例えば、マンションの自治会の人たちがやってもよいわけですし、そういった方たちがご近所に向けてやってもいいでしょうし、民間でもできることかなと思います。

○宮脇部会長

中野区さんは今ご指摘があったようなことで、何か動いている団体とか、そういうものはあるのですか。

○高橋 宏治委員

地域の中では、例えばマンションだけでさまざまなイベントを組んだり。それから、地域の活動グループが一緒になってのイベントというのかなりあります。

でも、現実にはそこは一生懸命やる人たちの集まりなのです。出ていきたくない人は全く来ません。だから、難しいかもしれませんが、全てが区民とするときには、そういう人と人とのつながりは勘弁してほしいという個性の人を、どうこちらへ呼び込むかという、そういう視点もとても大切なのではないのかな、と思います。

○宮脇部会長

確かに1人でもいいから、そういうところのつながりを持っていくということは、これからは不可欠だと思うのです。何かそういう視点で取り組まれているものはあるのですか。

○高橋 佐智子委員

地域というより、やはり町会でも商店街でもそうなのですが、それぞれ行政の手をかり

ながら、いろいろなイベントをやっております。でも、ただ町会の組織でも、全体でやったりはしているのですが、出てこない人は出てこないですね。

出てくる一番の仕掛けとしては、子どもさん対象のイベントだったり、何か楽しい催し物を作って、それでもっておみやげがつくよ、なんて言えば、子どもさんを連れて、親も出てくるのですが、そこから先をつなげるのに、すごく難しいですね。

それから、あと今、マンションとおっしゃいましたが、マンションの人たちが一番難しいです。というのは、マンションは今、名前がついていませんから、誰が住んでいるかわからないです。

マンションへは、町会等の団体がポスティングしていませんし、回覧板が回りません。そうすると、陸の孤島になってしまっている。

子どもを対象に何かをするということには、子ども会、学校の子ども会を使うとか方法はありますが、大人や1人所帯の人は全然わかりません。

今、どこの町会でも50%入会してくれているのがいいほうです。30、40というところもございませぬ。それをどうやったら大勢の方たちに町会に入ってもらえるのか、常に町連でもそれが課題になっています。

それともう1つ、都営住宅に済んでいる方が、なかなか町会にまとまって入ってくれないのです。というのは、東京都が大家さんで、家賃は東京都に払っているのですよね。そうすると、そちらのほうから指令が出ない限り、固まらないのですね。あそこに住んでいる方たち。それを何とかしなくてははいけないなと思っておりますけど、なかなか難しいですね。

都営住宅でも自治会に入っているところもあるのですが、新しい都営住宅は全然入りません。やはり陸の孤島になって、知らせがいかないですね。その辺のところはすごく町会としては難しい課題を抱えています。

行政の方たちは、仕掛けをしてくれたり町会にもいろいろな形でもって応援してくれているのですが、それをもう一步踏み込むというのがなかなか難しい。

私などは、ここの四季の森公園などで、全体の人目につくようなイベントをやっていた。それから例えば、中華の何とかとか、激辛何とかとか、食べ物のイベントには若い人たちが入ってきているので、そこを利用しながら何か若い皆さんの力を借りて、できることはないかなとは感じます。

やっぱり人の集まる場所を狙うということでしょうね。なかなか難しいですよ。1人

所帯、それから人には世話にならないよ、という人は結構いますからね。

○宮脇部会長

例えば自治会とか、一定の団体というのを支援することによって、克服できる部分とそうでない部分が恐らくあるということ。

行政が本当に踏み込んでいかなければいけないのは、そういう自治会とかではできない部分ですね。そういったところにターゲットを持った一定の政策を打つかどうかという、こういう話で。

こういうことに対して、中野区としては、今はダイレクトな政策というのは特に打っていらっしゃらない、と考えていいですか。

○宇田川区民活動推進担当課長

今年度から区内に4つあるすこやか福祉センターで、アウトリーチチームというのをつくっております。

事務職だけではなくて、保健師とか福祉職が連携しながら、地域の活動を支援したり、それから地域の課題を把握していく。それから、地域での活動をつなげていくというようなことを、アウトリーチでやっていくということで、4月からチームという名称をつけて取り組みを始めているということが、もしかしたらここにつながるのかなど。

○高橋 佐智子委員

今のすこやかの話なのですが、何か起きたときに、例えば1人所帯とか1人の人たちの個人情報というのが一切出てこないのですね。私は、1人所帯の方の課題を解決したいと思って、すこやかに問い合わせ、その状態を教えてくださいと言ったのですが、個人情報で教えられませんと言われてしまい、困っている案件を私は今抱えているのです。

こちらから仕掛けていって、向こうから返ってくれば、物事は広がっていくと思うのですが、なかなかそういう人は返ってこないのですよね。自分から自分のことをさらけ出して、みんなのところに飛び込んでくるという人だったら問題ないのですが、そうでない人たちが困っているわけです。

行政の縛りというのか、我々に通じてこないものがいっぱいあります。問い合わせでも解決できない。その辺がどうなのか。

○宮脇部会長

そういう場合の対応というのは、どういうふうにされているのですか。

○宇田川区民活動推進担当課長

基本的には、個人情報で、地域の皆さんにお渡しできない、というのは実際にはございますので、情報をいただいた折には、アウトリーチチームもしくは民生委員さんが、連携しながら解決に動く、それで解決をして、ご報告をしていくという循環になるのかとは思いますが、うのですけれども。

○高橋 佐智子委員

報告はないですね。一方通行です、全て。民生委員さんから出てきた情報は一切一方通行で、我々には一切出てきてない。だから、地域で手の貸しようがない。

我々にとってどこまで案件が進んでいったかの情報も入らないし、どういうふうにしてこの人は解決できましたよ、ということも入ってこないから、民生委員もわからないし、知らないわけですね。

だから、個人情報は出せなくてもいいですが、その経過ぐらいは教えてほしいというのが、我々の要望なのです。

○宮脇部会長

確かに今までのようにアウトカムではなくてアウトリーチになったことはいいことだと思うのですね。一歩前進と。ただ、それが今ご指摘のように、地域とのネットワークという、そういう構造にいろいろな問題があってなっていないと。

では、セカンドベストでどういう構図をつくるのかと。個人情報保護もあることは間違いないですけど、それを地域のネットワークの中につなげていかないと、これは地域全体では見ていけないわけですから。

そういうところの行政側をバックアップするような言い方が、我々としてもできると思います。正直言って今、行政が個人情報と言われると、動けなくなります。過度な構図になっているので。

○高橋 佐智子委員

つながっていかないとういことですよ。

○宮脇部会長

そういうことですよ。

○横田委員

外国人のことで、規模も違うのであれなのですけれども、人口7万人ぐらいの国立市で昔やっていたのですが、国立市の地図を碁盤の目のように全部細かく割って行って、外国人の方が来られたら、毎月発行しているニュースをノックして届けるという作業を、20年

ぐらいやっていました。小さいところですのでできるのですが。

外国人の方でも、自分はそんなの要らないと言っているわけじゃなくて、必要な情報が来ないというものを、1回はノックしてお会いしてお渡しして、こういうのがありますよと、韓国語、中国語、英語とやっていました。

これはボランティアでやっていた地域の国際交流の会ですけれども、自分の近くに来た、お1人で暮らしておられる方とか外国人の方とかを、そういう形で互いに助け合うというやり方でやっていたことがありました。

○宮脇部会長

何らかの形でネットワークと結びつけるということが重要で、行政側の壁というのがありますので、そこを何らか我々としてサポートできるような視点というものも持って整理していきたいと思います。

ちょっと前に進めまして、今まではどちらかというところ、ネットワークですとか地域というところ、協働というところだったのですが、我々としてまず(4)経済活動ですね。経済活動の活性化という問題と、それからもう1つ、文化芸術というところがありますので、ちょっと協働のところといいますか、地域というところとはちょっと視点が変わるかもしれませんけれども、「区内経済活動の活性化」というところも含めて、ご意見をお願いしたいと思っています。

○小池委員

区内経済活動というところ、ここでビジネスを興すという人たちがいれば、別のところに拠点を持って、中野区で商売されている方もいらっしゃると思うのです。例えば、ディベロッパーさんがここでマンションをつくって売るということもそうですよね。

先日、私は仕事の関係で視察で、イギリスに行ったのですが、リバプールでディベロッパーの人たちが建物をつくるところに、地域の文化芸術団体が加わって、そのブランディングとかを一緒にやる。そのディベロッパーさんは、その高級コンドミニアムを投資家に売らないで、住む人だけに売るんですね。

買った人たちと、もともとの地域の人たち、買おうとしている人たちをパーティに招待して、おいしい食べ物とおしゃれな感じのパーティを開いて、そこでここに住みたいという人たち、ここでつながりたいという人たちにその建物を買ってもらって、地域や、ディベロッパーさんにも還元して、そのつながりを濃くしていくという取り組みをやっているところを拝見したんですね。

正直、売れてしまえばいいというところから、ここで生活していきたいという人たちに向けて、商売をしてもらうとか、そういったところの視点があってもよいのかなというのをちょっと見ていて思いました。

○笠尾委員

質問なのですが、それは住民同士がつながるといことが前提になっている。

○小池委員

そうですね。やはりこれから住もうとしているところで、ご近所さんになる人たちとの交流を通して、ここを買おうかどうしようかということを考える。

買おうとしている人たちの顔が地域の人たちにも見えているし、お互いに顔を見知った状態でその物件を買うというのをやっていて、おもしろいなと思いました。

○笠尾委員

そういうのができるといいですね。

○小池委員

そこで生活しながら、ここでビジネスをやっているという人たちで、コミュニティをつくっていくという売り方ですね。寝に帰るだけではなくて。

○高橋 佐智子委員

日本の、まして東京の真ん中で、マンションを買う人というのは、隣近所の人たちとの付き合いが面倒くさいからマンションを買うというのが今の風潮ではないですか。一軒家ならまた別なのですが、マンションとなると、もう隣同士がわからないような、今はそんなことで事件なども起きていますが、東京の人は特にそんなのではないのでしょうか。それで困っている部分はいっぱいあるので、そういう形になってもらえれば、一番いいことだと思います。

○岸委員

考え方だと思うのですが、今、うちの町会でかつて小学校だったところにつくっているマンションは、開発、企画する段階から地域のコミュニティと一緒に住む人が住むこと、というのが考え方の中であって、そのマンションギャラリーの人と共同で、私たちの町会の情報をつくってもらって、マンションの販売の人にはかなり巨大なH判のパネルをつくってもらったのですね。

だから私も、完成したマンションをこれから購入する人たちと結構話をして、どんな人たちが住んでいましたとか、どんなことをやっているのですかと、お互いに話しながら

時間を過ごしています。

販売会社も、入居者が全部入ったら、先ほど言われたような隣人まつりですね。それを行いたいというので、それも予算化してもらって、計画しています。

そういうことをやっていくと、やはりマンションに住む人たちと今度会うのが楽しみになっていくのですね。買いましたので、今度来ますねという人たちと、たまにまちで会って話すのですけれども、そうすると、また今度会いましょうみたいな話につながる。不可能ではないような気がするのです。

○高橋 佐智子委員

基本的に近所付き合いが面倒くさいと思っている人たちが都心には多いなと感じているのですけどね。

○横田委員

1人の人の中にも、面倒くさいなと思う気持ちと、やっぱりつながりたいなという気持ちがある。

○高橋 佐智子委員

いろいろですよ。

○岸委員

無理につながる必要もないし、お互い認め合うみたいのところぐらいでいいかな、というところは最低限、みんなに持ってもらえればいいかなと思います。

○宮脇部会長

今のご議論の中で、まさに持ちかけ方だと思うのです。というのは、我々総合計画のイメージづくりなので、どうしても区役所というところを含めて、どうかかわっていくかということになりますから、そこにどう、今おっしゃられたようなことですね、すごくいいことだと思いますけれども、どういうふうに計画とか、戦略の中で結びつけていくかですね。それはディベロッパーがいいところであれば、それをやるでしょうし。そうでなければ売ればいいという考えでしょうし。それを中野区特有のものとして、どう展開できるのかという部分はあると思いますね。

○小池委員

(4)番のところ、行政がすべきことというところの1番かもしれないのですけれども、民間の皆さんと一緒にやっていただきたいことは、民間の立場の人たちと協働してやっていくことだと思うのです。経済っていうのは、その視点が全体にあったほうがよいのかな

と思いました。

○宮脇部会長

要するに、この区民と行政の協働というところで、区民というのが民間企業だとか、そういうものというのは直接的にはイメージがしづらい。それから特に、中野区以外のところから活動してくる部分でいうと、なかなかこの概念が入れづらい。そういうご指摘ですね。

○小池委員

はい、そうです。

○岡井委員

左上のマス目が一文字もないのがとても気になっておりまして、これはどうすべきなのかなど。やはり、このマス目の「多様な人と人とのつながり」ということが、どれをやるにも大事だということで行くと、ここがないと、ほかの3つのところにもつながらないので、何か入れないといけないのではないかという義務感と責任感でいっぱいです。

先ほどのマンションみたいな例で行くと、ただ単に建物が経済的に建ちますよというところに、何か掛け算が起こったことで付加価値が、おもしろいものがここにできているようでした。だから、誰かが何かをやろうとしているときに、違う人が何かを掛け合わせることでより価値が上がったまちになって、人が集まりやすくなって、魅力が増すみたいな。何かそういうようなことが、うまく言えないのですが、何か入ればいいなという感じだけはします。

○高橋 宏治委員

今のお話で、中野区の経済会が、商工会議所と工業産業会、それから老人会、しんきん協議会、それから商店街連合会というのが、今は何かイベントをやるときには手を結べるのですよ。昔はそうじゃなかった。やっところに来て、全て手を結べるようになりました。

それから、町会連合会の会長さんとも話して、ありがたいことに商店街のイベントやさまざまなものも、町会の回覧だとか掲示板にも張っていただけるようになってきて、経済会だけではなくて、活動団体と一緒に何かやるときには、全ての団体に情報が流れる仕組みはできました。しかし、経済会を全部つなぐ仕組みというのは、意見を統一させなくてはならないという部分では、かなり仕事量が増えます。

商工会議所などは、若手が大勢来て、しっかり育ってはきているのだけれども、一生懸命やってきた人間たちがみんな高齢化してきていて、ちょっと疲れ果ててきているという

のがあります。そこで、仕事量を補佐するというのですかね。そういう部分の行政の仕組みがあつたらいいなと思っています。

○笠尾委員

そういう経済界が手を結ぶ仕組みというのは、どうやってつくり上げるものなのですか。私がかかわったところは、大体はつながっていませんでした。つながるのはすごく大変なことだと思うのですね。しかし、つながっているのが組織ではなくてキーマン同士だと、キーマンが高齢化してしまうとだめだということになってしまいます。せっかくつながったから、組織同士のつながり、つまりシステムにまでなればいい仕事ができる。

○高橋 宏治委員

そうですね。だから今、それぞれの会の若手を全部入れ込んで、それを申し送りするようにはしているのですが、それでも個性がありますから、けんかつ早いのか。人の意見を聞く人ばかりならいいのですよ。ところがそうではなく、意見に反発する人もいますから。そういう仕組みの中で、人間を育てるというのですかね。育てていく仕組みの中に行政もいてくれないと。

○笠尾委員

教育システムも一緒にそういうことをやっていかないといけない。

○高橋 宏治委員

行政も一緒に育てていくというのですかね。

○横田委員

システムってどんなものなのか、というのをちゃんとイメージしたいのですが、なかなか難しい。1つのテーマの実現のために、いろいろな団体に関わるときに、協力して若い人たちの出番をつくり、教育としても機能していくような体制でしょうか。いずれにしても、具体的に魅力あるものがないとなかなか活動できませんね。

○笠尾委員

そうですね。多様とは言いつつ、何かしらの共通のテーマみたいなことがないとつながりにくい。

○高橋 宏治委員

経済会のためには、まちづくりガイダンスを構築しようという形で、意見を出し合っているのですよね。まちづくりって、まちおこしと一緒にしよう。全ての問題が入ってくるのですよ。後継者不足から高齢化から、さまざまな問題が全部入ってきます。それを全体

としてやっていかなければいけない問題がありますね。

そこに行政も入ってないと難しいのです。特に行政の中では議会がありますよね。議会の問題も絡んできますから難しいのですよ。

○宮脇部会長

今のご議論を聞かせていただいて、(4)のところなのですけれども、最初に言われた民間ですね。民間と、それからディベロッパーを例に挙げられましたけれども、民間企業とその地域というものの連携。我々は地域連携というと、すぐに官民という発想で物を言う場合が多いのですが、必ずしもそうではなくて、民民連携というのも当然これは地域においては必要ですね。

先ほどのご発言にもありましたけれども、ここが空欄というのはおかしいので、「多様な人と人とのつながり」として、まず1つそれはあるだろうと思うわけです。

それから、今のシステムづくりの話です。システムづくりを考えるとときに、やはり、幕の内弁当だと無理だと思うのですね。あれもこれもこれもこれもというと、なかなかみんな負担感が。

したがって、先ほど言われたように、特定の目的というのをある程度絞っていく必要があります。そのうえで、ある程度自由な活動をするということになると、私の分野でSPC（特定目的会社）というものがあります。そういうものを幾つか、多層的というか、いろいろな角度で立ち上げていって、民間もそこに入る。当然、そこに住民の人とか地域の人も入っていく。何かそういうものをきちんとつくっていかないと、属人的になってしまって、持続的な構図というのは難しい。

恐らく、行政が行政のまま入るということになると、かなり難しいと思うのですね。先ほど言われたように議会の問題など、いろいろな制約があります。だから、そこからちょっと離してあげる仕組み。非常に重要なお議論だと思います。これも少し検討させてください。

ただ、今ここですぐには書けるのは民民連携ですね、いろいろな形での。ここは、経済活動であっても当然あり得る。

○横田委員

経済活動というところで、人と人とのつながりというのを考えるときには、この人と人とのつながりには、やはり何らかの経済活動を目的としたものだと考えなければいけないのでしょうか。あるいは、経済団体のような企業とかというものが、中野において大きな

資金力を持っているわけですから、そういった経済活動が、例えば子どもたちの何かに投資するというか、集まって何か福祉的なことをみんなでやるみたいなことを考えることもできるのでしょうか。

要するに、経済活動の活性化を目指した人のつながりでやってしまうから、どうしても経済団体同士の活性化のイベントだとか、商店街の活性化のイベントだみたいになってしまって、すごく狭まってしまう。そうすると発想がちょっと湧いてこないかなと思うんだけど、やはり企業や商店街や大小問わず経済活動の団体の人たちが集まって、賛同して、参加しようといってくれるようなもの、人づくりや子どもづくりなんかができたらいいと思っています。例えばその中に、大学の学生たちというものも入っていけるような形にしてみたらいいなと思いました。

○宮脇部会長

恐らくこの区分でいくと、経済活動と書いてあるので、民間企業の資本の増殖ということ完全否定してしまうというのは適切ではない。そういう考え方だと思うんですね。しかし、今、先生が言われた資本の増殖は別にマーケットだけでやることではなくて、地域で持続的に活動し、信頼感を得ることによっての資本の増殖はありますよね。要するにキャピタル的なものを増やしていくという。

だから、そういう意味で限定的なマーケットという概念ではなくて、広く捉えていくと。ただ、そこで否定してはいけないものというのが恐らくあるわけですが、その部分を共有しながら、少し間口を広く考えるというのは、これは十分あり得るだろうという感じはしますね。クラウドファンディングとか、ああいうのも含めてあり得るだろうと思います。

○岡井委員

実体はどこまであるかわからないのですが、渋谷区で、S-SAP（シブヤ・ソーシャル・アクション・パートナー）というのがあって、渋谷区でいろいろ社会的なものを協力するよということ区と協定を結んでいるという企業が何十社ある。細かいところでどこまでやっているかは、すみませんが存じ上げないのですが、一例としてはあります。

○小池委員

話は飛ぶかもしれませんが、多様なというところで、福岡市は、外国人の企業のスタートアップのサポートをやっていて、ビザのサポートだとか、実際に企業を立ち上げるときのサポートを多言語でやっているんですね。アジアが近いというところであったりとか、

文化・芸術って、それだけでごはんが食べられるものではないので、やはり平等にという大変なのですけれども、ここで行われている活動という位置づけ、区民というよりも区内で行われている文化・芸術活動と行政がどういうふうにかかわっていくかという読みかえのほうがいいのかなと、個人的には思います。複雑な話なのですけれども。

○高橋 宏治委員

実際には、例えば棟方志功さんの展覧会は、版画をお持ちの方が何人かいらして、経済会でやらせていただいたのです。そのときに行政の方にも何人か交代で受付やってもらったり、参加してもらっていました。

そういう形でそれなりに参加してくださっているのですけれども、あまり協働はできていないかもしれない。

どうしても経済会はお金の話ですから、率先してやっていってしまうのでね。ぜひお願いしたいというところがあるのですが、何かやるときにそれを普通に支援していくようなセクションがあるといいかもしれませんね。

○笠尾委員

身近にある文化・芸術の定義って、どういうものなのか。立派なものでなければいけないのだよという言い方も妙な感じですけど。

○横田委員

もうちょっとハードル下げたほうがいいですよ。中野の飲み屋街も芸術といえば芸術の気がする。

○宮脇部会長

空間としてはそうですね。

○笠尾委員

ここにも「中野には国の文化振興施策のジャンルに含まれない人がたくさん集まっている。その面白さを」ということも書かれているので、文化・芸術というものをどういうふうに捉えるかみたいなことがまずあっていいかなと思います。

○高橋 宏治委員

中野の場合にはあちこちで小さい劇場がいっぱいあって、それなりの劇団があるのです。大変だから1年に1遍とか2遍しか公演しませんけれども、その人間たちを支える仕組みがあるとおもしろい。

地域社会のまちづくりなどは、そういう1つのグループを抱え込んで、面倒見たりしま

すけれども、全体でやれたらいいかもしれませんね。

○笠尾委員

演劇的な手法というのは、いろいろなところで今は活用されていますから。直接的なかわりもつくれそうな気がしますよね。

○岸委員

日比谷高校でしたか。全てのクラスで文化祭で演劇をやる。すごく意義があるらしいですね。アクターになるとかならないということと別に、演劇体験というものは、かなり強く残るものがあるみたいで。それって人が豊かになるのに非常に有効なことなのだろうと思うのです。それを高級なところで閉じ込めてしまうのはもったいないので、うまく拡散できて民間のレベルが上がるような、ひっかかりがつかれるとおもしろいかなと思います。

○高橋 宏治委員

ふだんのつき合いのときと別人になるのですよね。こんなことやるのだと非常に感動する部分があって。仲間も来ていますし、親兄弟も来ていますから、それなりに全体として膨らんでいるのですよね。そういうのを支援できると何かいいかもしれませんね。

○宮脇部会長

例えば文化・芸術、特に今ご議論いただいたのは芸術のほうが中心でしたが、これは別の言葉にすると、どういう言葉がフィット感があるでしょう。確かに芸術といわれると彫刻があったりとか、素人だとそういうふうと思うし、札幌市などはそれに力を入れてしまい、いろいろあるのですけれども。

○横田委員

文化・芸術よりはアートのほうがいいと思います。ただ、アートというだけだと、しかし理解も多様だなとも思います。

○宮脇部会長

なるほどね。

○横田委員

ハードルを非常に下げたものでも、何かごちゃごちゃにいろいろなものが入っていておもしろいという、中野が持っている特性でもあるので、そんなものを表現するのがあるといいですね。

○宮脇部会長

なるほど。

○小池委員

国の施策で文化・芸術という順番で言い始めてしまったので、ずっと最近そういう感じなのですが、本当は芸術って、文化というものの中の一形態だから、昔は芸術・文化という言い方だったはずなのに、何かちょっと変わってきてしまっているのですよね。だから、幅広く文化なのか、芸術の部分の話なのかという、ちょっとややこしい話があるなと思います。

○宮脇部会長

皆さんにお考えいただいていることが、きちんと区民の皆さんに伝わっていくということが必要なので、そのとき、こういう言葉というのは、最後の重要な点になるので、この辺のつくり方ですね。

○横田委員

アートというようなものであれば、それぞれがお互いの存在を知ると、すぐに一緒にできます。演劇だって2つの種類の演劇が一緒になったり、音楽と一緒にあったり、あるいは創作美術と一緒にあったりできますから。教育とも一緒に成れるので。

まさに人と人とのつながりというか、そういうことをやっている人たちが、団体同士や存在同士がつながるようなマッピングをしたりする。そこに参加するという観点からすれば、1年間の共通パスポートみたいなものを作って、それを持っていると、いろいろなところのいろいろな芸術文化、いろいろなものに参加できるようにしたり、すごく広がりようがありそうな気がします。

○宮脇部会長

先ほど教えていただいた演劇ですとか、今おっしゃられたようなマップ化の問題なのですが、どこでどういう公演があるとか、あるいは誰がどこでどういう作品を展示しているとか、そういうものを一括して認識できるという、地域として認識できる仕組みみたいなものはあるのですか。

大体、いつの時期にこういう小さい演劇集団が何かやりますよとか、先生が言ったマップ化みたいな一覧性のあるものは、今どこかにあるのですか。

○高橋 佐智子委員

ありますよね。ゼロホールで何があるとか新聞で出てくる。

○高橋 宏治委員

大きいやつは分かる。ただ、小さい劇場でやるときには、それぞれの劇団は、いつやれ

るかもはっきり決まりませんし、訓練の時間も必要なのです。だから、ぎりぎりにならないとなかなか。

○高橋 佐智子委員

野方WIZでもバンドの人たちなどがやっていますよね。ああいうのが発信できていないということですか。

○高橋 宏治委員

ある程度の大きさの劇場は発信できているのです。ところが、小さい劇場をまとめて情報というのはなかなかないでしょう。

○永見基本構想担当課長

公共施設でやっているイベントというのは、区のほうで把握ができていますので、それはある程度一覧して発信できていると思うのですが、民間のスタジオとかは把握できていない状況です。

○高橋 佐智子委員

ポレポレ東中野のようなところでやっているものは、我々の耳には入ってきませんよね。

○永見基本構想担当課長

そうですね。それぞれ1個1個調べるしか、今のところは探せないのではないかなと思います。

○宮脇部会長

そういうもののネットワーク的な把握というのは、今はありませんということですね。

○岡井委員

今話が出ているのって、ある程度以上のレベルでの表現活動になっている。劇場を使えとかライブするとか。

スポーツと同じで、最初は、公園でボールを蹴ってとか、そういうもっと裾野のところからだと思うので、そういった裾野がもっと盛んになると、上のほうももっと活発になってくるのではないのでしょうか。そういう考え方でもしいくとすると、何か絵を描いても大丈夫なところとか、音を出してもいいところだとか、いろいろあるといいのではないのでしょうか。例えば、迷惑にならないという場所で夜中サックスを練習できるとか。そういうものがいろいろ、やってもいいよという場所があると、裾野は広がりやすいのではないのでしょうか。

○笠尾委員

それすごいいいですね。大体だめなものばかりだから。これはいいよみたいのがあったら、ちょっとすごくいいですね。

○宮脇部会長

恐らく、区民にとって行政の協働だとか人のつながりというところで、今ご指摘があったようなことを書き込んでいけば、そこを読むことによって、我々が文化・芸術と言っていることの意味ですね、もっと言葉遣いとして何かあればいいのですけれども、なかなかこれが難しいとすれば、そういうものを示していくというのもまた1つかもしいかなという感じはしています。

そのほか、全体を通していかがでしょう。コアになるところは大体示していただけたので、また整理をしていきたいと思います。

それで、今の議論を進めるに当たりまして、資料5という横長の資料がありますけれども、現行の基本構想との対応表をつくっていただいています。これもご覧いただきながら、他の部会での議論というのも全体的に眺めながら、我々としての答申のイメージというのをつくっていききたいと思っております。

先ほどちょっと議論がありましたけれども、例えば、1ページ目の一番下の空欄になっているところは、現行の基本構想には記載があるけれども、答申のイメージとしては、我々のところでまだ何も出されてはないということで空白になっています。

特にそこだけということではなくて、これも参考にしつつ、今までの議論の中でご指摘をいただけていることについてもご発言いただけると助かりますと、そういうものです。それを踏まえて、全体のご議論、もう少しお願いします。

先ほども外国の方々へのサポートみたいなご発言が少しありましたけれども、それなどはこの2ページ目のI-4の「多様な経済活動で多くの就労の機会が生み出されるまち」のところの、今は空白になっていますけれども、こういうところを仮に埋めるとすれば、そういったご発言というものを含めていくということは可能になるかという感じはしています。

そういう意味で、どんどんご発言をいただいて、整理をしていきたいと。

○横田委員

外国人の就労状況、これ非常に大変な方々もいらっしゃる中で、中野で外国人が働きやすいまちだというブランドになってきたら、とてもいいなと思いますね。

そのためにどういうことが必要なのかということもあるし、そういう支援ができるのか

ということも含めて、中野の企業が外国人をきちんと人権を守った雇用をするのだということも明らかにしていく活動につながっていくといいなと思います。

○高橋 宏治委員

国際交流協会のほうでは、英語と韓国語の支援をしているのですよね。だけど、それ以外の国はなかなかやれていない。それから、中野に来られた家族、外国の方たちの日本語の指導というのはやっているのですが、結構定員いっぱいになってしまうのですね。だから、教室が間に合わないという状況もあります。

中野区の観光協会は3カ国語くらいで対応してもらって、先生のほうにお願いして、商店街マップの作成はやっていただいているのですが、それほどこで何が食べられるとかというものです。一方で、哲学堂の場合には5カ国語でちゃんと案内を出してくれていますよね。だから、もっと広範囲で同じような規模で対応できたらいいかもしれませんね。オリンピック・パラリンピックもありますし、これから外国人の来街者は増えますからね。

それから、オリンピックに向けて、不動産関係の方たちが、懸命になって今、外国人向けのアパートを駅周辺で、建ててくれています。

それから、マンションの空き室をどうするかということも含めて、対応はしてくれているのですが、多分間に合わないと思うのですね。

そういうのは、中野区のほうには入っていますか、情報。

○永見基本構想担当課長

ある程度聞いている部分もあります。全て把握しているわけではないですが、そういったところもあります。

○横田委員

外国人の問題は、本人が外国人であるというだけではなくて、家族を持っていれば、子どもの問題とか、高齢者としての外国人の問題とかあるわけだから、ほかのところにもつながってきますけど、やはりちゃんと住んで、ここで根を下ろして仕事をしてほしいと考えれば、そういう外国人の課題に対する支援のことも考えなければならないですよね。

○高橋 宏治委員

国際交流協会では外国人の方たちや子どもたちに、日本食のつくり方を教えたり、出身国の食事を私たちに食べさせてくれたりという、人数が限られてしまっていますが、そういう交流もかなり長いことやってきています。

○宮脇部会長

前にもお話ししましたように、中野区の場合、ほぼ満遍なくどの地域にも外国人の方々が住んでいるので、コミュニティ、教育の問題、こういったものに全てかかわるとい、そういう状態です。やはりこの問題は中期的な視点としては落とせないと思います。

そういう意味で、このグローバルなところとか、経済活動に限らずですね、少し指摘を埋めていくということは可能かと思います。

そのほか、ちょっと眺めていただきまして、この辺はこういうことがあるのではないのみたいなご指摘もいただければ助かります。

それでは、一応、これからのスケジュールというのを踏まえさせていただきますと、部会そのものとしては、次は8月16日（金曜日）になるのですが、その前に、7月29日（月曜日）に全体の会議があります。そこで、一旦今までここで議論したことにつきまして、部会としての報告をするという、そういう形になります。もちろん、それ自身が全て原案になるわけではないのですが、部会としてどういうことを考えましたかというのを共有していくという、そういうプロセスになります。

その後、もう一度部会を開かせていただいて、それでまとめに向けた全体会議というのをその後、2回程度開催するという、そういう流れになるわけです。

今回、ご議論いただいたことが部会での最後になるわけではないわけですが、できれば7月29日（月曜日）に部会として報告することについて、審議会全体として共有していただきたいことは、できるだけそこでは出していきたいと思います。

今日はいただいた時間、もうぎりぎりになっています。今日は冒頭の資料が結構多かったものですから、消化不良の方もいらっしゃると思うのですが、もう一度見ていただいて、先ほどみたいに空白が多いとかちょっと薄いところについて、ここはイメージを入れておいたほうがいいよねとか、そういったお気づきの点があれば、事務局のほうに積極的にお寄せいただければと思います。

それでは、大変残念なのですが、充実した議論をありがとうございました。今、申し上げましたように、次回第5回の部会につきましては、8月16日（金曜日）19時から、会場は中野区役所を予定しております。第5回の部会というのは、部会としては最後になります。これまでの審議内容というものをまとめるということです。ただ、その間に、全体会が7月29日の19時から、中野区役所で予定しております。

今日ご議論いただきましたような、資料1をベースにしながら、資料を共有していき

いと思っています。

それでは、事務局から連絡事項がありましたらお願いします。

○永見基本構想担当課長

今日お車の方はいらっしゃいますでしょうか。後ほど駐車券の処理をします。以上です。

○宮脇部会長

ありがとうございました。それでは今、お願いしましたように、お気づきの点がありましたら、積極的に事務局のほうにお寄せいただきたいと思います。

以上をもちまして、中野区基本構想審議会自治・共生・活力部会第4回を閉会させていただきます。

どうも遅くまでお疲れさまでした。ありがとうございました。

— 了 —